

チュートリアル課題 12月の雨の日

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-06-24 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 東京女子医科大学 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.20780/00032231

2013年度 Block. 5

課 題 No.3

課題名：12月の雨の日

課題作成者：感染症科

平井由児



無断で複写・複製・転載すると著作権侵害となることがありますのでご注意ください。

シート1

Rさんは25歳の女性。

語学のスキルを活かし、外資系企業に就職し、多忙な毎日を送っています。
先月、1年間交際していたパートナーとは別れてしまいましたが、やっと立ち直ってきたところです。

約3ヵ月くらい前から咳が出るようになってきました。
ここ2週間程でそれはさらに悪化しました。
近所にある子供の頃からのかかりつけの医院で鎮咳薬などを処方されましたが、一向に改善しません。
長く続く咳を心配した医院の先生は、こう言ってRさんの自宅のすぐ近くにある大学病院の受診を薦めました。

医院の先生：「長く続く咳にはいろんな原因があるので鑑別をする必要がありますね。ここではできない検査もあるから、おおきな病院でもう少し詳しく調べた方がいいと思います。」

Rさん：「いろいろとといいますと・・・??」

先生は言いました・・・

シート2

Rさんは近くの大学病院の呼吸器内科を受診し、問診や診察を受けました。
担当の先生はその日に撮影した胸部エックス線検査をみながら、こう言いました。

呼吸器内科の先生：「この胸部単純エックス線写真の所見では左の肺を中心に影があります。胃にガスがたまっている所見もありますが、こちらは異常所見ではありません。本日、胸部CTスキャンを行い、気管支鏡検査の予約をしたいと思います。採血の結果は次回報告しますね。」

咳が1ヶ月以上も続いていると、仕事場の同僚にも心配されるのはもちろんのこと、仕事先のクライアントにもいい顔はされません。
いつも咳をしていることで仕事先の相手にも嫌なイメージを持たれなくなかったRさんは、思い切って検査を受けることにしました。

呼吸器内科の先生：「こちらの病院では気管支鏡検査を行なうにあたって肝炎ウイルスや梅毒、HIV抗体を調べることになっています。検査の同意書に加えて、こちらの書類にも御署名を頂けますか？」

Rさんは「HIV」と聞いて少し驚きました。

よく思い出してみると、大学の同級生が妊娠した際に、産婦人科でHIVの検査をしたとっていました。
また、ヴォーカリストをエイズで失ったとあるバンドの曲「ボヘミアン・ラプソディ」を以前に交際していた彼がよく口ずさんでいたことも思い出しました。

シート3

数日後、採血と胸部CTスキャンの結果を聞くためにRさんは再び大学病院を受診しました。胸部CTスキャンでは腫瘍やリンパ節の腫大はありませんが、「間質性肺炎」が疑われるとの説明を受けました。気管支鏡検査は来週行なう予定になっています。

呼吸器内科の先生は、汗ばみながらこう言いました。

呼吸器内科医：「それと・・・RさんのHIV抗体検査が陽性なんです。HIV抗体の確認検査（ウエスタン・ブロット法：WB法）も陽性でした。」

それから、感染症科の医師と専任看護師を紹介されました。

Rさんは頭が真っ白になりました。

その後の先生の説明はほとんど耳に入ってきません。

汗が耳の後ろを流れていきました。

話を遮るようにRさんは聞きました。

Rさん：「先生、私ってエイズなんですか？ それってどんな病気なんですか？ 私って死ぬんですか？」

シート4

Rさんの診断はHIV感染によるニューモシスチス肺炎（ニューモシスチス・ジロヴェチー）肺炎でした。Rさんはエイズの指標疾患を発症していました。

画像検査所見で間質性肺炎の所見があり、気管支鏡で採取した喀痰のグロコット染色はニューモシスチスを認めました。喀痰のニューモシスチスDNA-PCR検査は陽性、 β -Dグルカン 551pg/mL（正常値：20pg/mL未満）と上昇していました。このとき、彼女のCD4リンパ球数 160/ μ L（正常値：700-1300/ μ L），HIV-RNAウイルスPCR 46000copy/mL（正常値：検出せず）でした。

Rさんは入院し、スルファメトキサゾール・トリメトプリム合剤（ST合剤）の内服を開始しました。治療期間は3週間でした。

この間に頭部MRIなどの画像検査や眼底検査、消化管内視鏡検査を行ない、幸いなことにその他の日和見感染症や合併症を認めませんでした。婦人科も受診し、現在は経過観察中です。

気持ちも落ち着いてきたある日、RさんはHIVを担当する専門の看護師さんに質問してみました。

Rさん：「私はなぜHIVに感染したのですか？」

看護師：「出産のときに感染する母子感染や針を使うドラッグが原因のこともあるけれど、ほとんどはセックスなの。」

「セックスのとき、相手の男性は必ずコンドームをつけていた？」

Rさんがいままで交際したことがある男性は2人でした。もちろん、ドラッグには興味すらありません。

でも相手の男性が、必ずコンドームをつけていたかというところ・・・。

シート5

Rさんには身体障害者手帳（免疫機能障害）が交付され、医療費の経済的負担はほとんどなくなりました。

退院してから1ヶ月ほど経過したところで、抗HIVウイルス療法が開始されました。
彼女は1日に1回、必ず決められた時間に合計4錠の抗HIVウイルス薬を内服します。

治療を一生涯続けることには不安を感じることもありますが、
彼女にとって毎晩22時に抗HIVウイルス薬を内服することは生活の一部になりました。

仕事にも復帰し、今までと同じようにフルタイムで働いています。
スポーツジム通いも再開し、以前と同じメニューをこなしています。

来年の春には友人の住むドバイに行くつもりです。
もちろん、旅先に抗HIVウイルス薬を持っていくことだけは忘れません。

病気の話は、まだ誰にも話していません。
心の中にしまったままです。
両親にも伝えようと思っていますが、なかなか実行に移すことはできません。
それは友人に対しても同じです。

看護師さんやカウンセラーさんに相談していますが、すぐに答えを出すことはできないと感じています。

退院から11ヶ月ほど経過した12月1日、この日は外来受診日でした。

彼女のCD4リンパ球数 463/ μ L（正常値 700-1000/ μ L）と回復し、HIV-RNAウイルスPCR 20copy/mL未満（正常値 検出せず）と抗HIVウイルス療法は十分な効果を認めています。

彼女はこれまでに一度も内服を忘れたことはありません。

外来を終えると外は予報どおりの雨でした。
クリスマスにはちょっと早いこの日、街頭のモニターに映る赤いリボンが交差点の水溜りに反射していました。

この日、12月1日は世界エイズデー。

この病気になるまでは気にも留めなかった赤いリボンですが、今の彼女には大きな意味を持つ「レッドリボン」になりました。